文化の知識が如何に外国語学習への動機付けに繋がるか：日米の大学生の意識調査

アンドレア・メイシー
ニコ・バウティシタ

カリフォルニア州立大学モントレーベイ校

要旨

外国語を学ぶ際、文化の知識は非常に重要である。それは文化を知らないと、語彙の微妙なニュアンスが分からず、実生活で遭遇する様々な状況に於いて正しい意味が通じないことがあるからである。また、文化は外国語学習をする上でのモチベーションに繋がる。この研究では日本とアメリカの外国語の授業の中でどのように文化が取り入れられているか。そして、文化がいかに外国語学習をする上でモチベーションとなっているかを調べるためにアンケート調査を行った。その結果、両国の学生は文化が外国語を勉強する事に関して非常に重要だと思っていることがわかった。しかし、その反面、日本の高校では文化が英語の授業にあまり取り入れられていなこともわかった。アメリカの学生も日本の学生も将来外国語を学ぶことによりコミュニケーションができるようになりたいと思っているようである。アメリカの学生の場合、日本語を勉強するきっかけとなったのは「アニメ」だという答えがほとんどであったが、日本の学生が英語を勉強する理由は「必須科目であったため」と「音楽の影響」が強いようだ。日本の学生もアメリカの学生も将来外国語を仕事面で活かしたいと考えている。また、日本の学生は仕事以外に英語を通して友達を作りたいと思っていることもわかった。

はじめに

外国語を学ぶ際、学んでいる言語の文化について知ることはとても大事である。語彙や言語の構成だけの知識では使える言語は話せない。語彙一つにもその国によって微妙にニュアンスが異なり、それがわからないため実生活で遭遇する様々な状況に於いて正しい意味が通じないことがある。ここでは言語学習にどのように文化が教えられきているのかを日本とアメリカで外国語を学んでいる大学生に聞き、どのように外国語を学ぶ際の動機づけになっているかを探る。

1. 研究の重要性

この研究課題を選んだ理由は、私達が日本語を勉強したきっかけは日本のアニメや

漫画や音楽に興味があったからである。このように多くの外国語をまなんでいる学生にとって文化が外国語を学ぶきっかけになるのではないかを思い、いかに文化への興味、や外国語での文化学習が外国語を学ぶ際の動機に繋がるのではないかを調べたいとおもったからである。外国語を学ぶ日米の大学生の場合に、文化をどのように学んできたのか、また如何に外国語を学ぶ目的に繋がっているかを聞いて文化への興味と知識がどのように外国語能力に影響するかをしらべたいと思った。

2. 研究質問

1. 日米の外国語の授業ではどのように文化を取り入れているのか。
2. 文化は日米の学生が外国語を学ぶためのモチベーションにどのように影響しているのか。

3. 研究背景

3.1 アメリカでの外国語教育の推移

まず、ここでアメリカでどのように外国語教育が推移してきたかについて簡単にまとめる。外国語教育は文法、翻訳が重視されていたが、1960年頃からよく使われるフレーズを暗記して状況に置き換え反復練習をするオーディオ・リンガルが普及した(Larsen-Freeman, 2016)。ACTFLガイドラインが1986年に出て以来如何に実社会でコミュニケーションができるかということに注目されコミュニケーションを重視したアプローチが広がった。ナショナルスタンダードが１９８６年に出て以来（現在はワールド・レディネス・スタンダード(ACTFL, 2012)に改正、文化を通して言語を教え、実社会で使える言語、そして如何に世界で活躍できる人材を目指すことに力が入れられている。

さらに、ACTFLの言語運用能力基準ACTFL(1986年, 1999年, 2001年, 2012年)は話

す、書く、読む、聞くの4技能に分かれており、初級から卓越級までわかれている(ACTFL, 2012)。2012に出たNational Stardardsは４技能ではなく5つのC 、つまり、コミュニケーション、文化、繋がり、比較、コミュニティなどを通して外国語のクラスで何を学ぶべきかを表記したスタンダードで今までの言語教育から一変した(National Standards in Foreign Language Education Project, 2012)。National StandardsのWorld Readiness Standardsでは文化を「文化の3P」プロダクト、プラクティス、パースペクティブから文化を言語のクラスに取り入れることを提唱しており、いままでのただ単発に文化のトピックを導入するのとは違う(Cutshall, 2012)。ACTFLはどのぐらいのProficiencyのレベルでコミュニケーションができるか、そしてNational StandardsのWorld Readiness Standardsはそれぞれのレベルで何を学ぶべきかを表示したものでどちらも欠かせないものである。National StandardsのWorld Readiness Standardsはコミュニケーションを3技能をさらにインターパーソナル ,インタープリティブ,プレセンテーションに分けている(National Standards in Foreign Language Education Project, 2012)。2015に改正されたワールド・レディネス・スタンダードはそれぞれの状況に於いてその文化にそくしてコミュニケーションができる能力が重要視され、グローバルに対応できる能力を言語教育で養っていくことを重要視している (Perugini, 2015)。さらに、２０１６年にはACTFLは外国語教師が言語を教える際に大事な６つの事項をコアプラクティスとして発表した。それは90%以上ターゲットとする言語で授業をする、コミュニケーションを促すための活動を授業に取り入れること、生教材を使うこと、文法はコンセプトとして導入してから練習すること、適切なフィードバックを常に与えることです(Swanson, 2015)。このことからも如何に文化が重視されているかがわかります。

3.2　日本の外国語教育の推移

次に、日本の外国語教育の歴史を簡単にまとめる。日本では小学校５年生から週に１回、中学校から４回外国語の授業がある(Løfsgaard, 2015)。課題となっているのは使える英語能力をつけることである。現在ではまだ暗記が重視されている他、入試のための教育になっている。また授業を英語でできる先生もあまりいないというのが現状である(Clark, 2009)。

3.3　これからの日本の英語教育

日本では2020年のオリンピックに向けて使える英語教育に力をいれている。小学３年生から英語を始め、担任の先生が週に1、2、回英語の授業をする(ICEF Monitor, 2015)。中学校でも英語での授業をすることを奨励し、身近なことが言えるようにすることを目指している(Masaaki, 2013)。大学入試も2020年からは大学入試制度も変更になる。年に一回だっだセンター入試から、回数を増やしたり、TOEFLのスコアーが必要になったりするようである。授業でいかにグローバル社会で必要な柔軟な考え方に対応できる能力をどのように授業にとりいれるかが課題だ(ICEF Monitor, 2015)。

3.4　モチベーションの理論と外国語学習

モチベーションとは人間性への原動力としてある行動へと駆り立て、目標へ向かわせるような内的過程である。行動の原因となる生活体内部の動因と、その目標となる外部の誘因がもととなるもので外国語を学ぶにはとても大事である(Liu, 2013)。GilbertとLambert (1959)は道具的動機づけと総合的動機づけが外国語学習には大事だとしている。またMahadiは内因的と外因的の動機も大事だとしている(Mahadi, 2012)。

道具的動機づけ、外交的動機づけは将来の仕事や卒業、収入等を目的とする。一方総合的動機づけ、内因的動機づけは学んでいる言語の人と話したい、文化を学びたいなどの総合的な目的から勉強する(Mahadi, 2012)。

3.5　外国語学習のモチベーションとしての文化

文化を学ぶことは外国語を学ぶ上での動機づけになるため今までの文法や単語等言語の構成の知識を学ぶより、如何に実生活で使えるからが学習者の動機につながる。ただしくいつどのように会話をするかはその国の文化がわからにとできない(Ogura, 2014 and Awad 2014)。

これはAwad(2014)と田中(2009)の研究結果にも示されている。つまり外国語学習には文化的な教材を使用することがとても大事だということがわかる。Awadが行ったアンケート調査によると、アメリカ人の大学生が学習を続けるために、文化を学ぶことはいい動機づけになると提唱しており、大学生が外国語を勉強したい理由である。学生は外国語学習を通しその国の文化が好きになる(Awad, 2014)。さらに、田中が行ったアンケート調査によると、日本人の大学生は授業で外国のドラマや映画を見るとモチベーションが高まったことを証明した。学生は内容が難しいが外国語を学ぶ良いチャレンジだと思うようである。このように学生のモチベーションを維持するために文化的な教材を使うことが大切である(Tanaka, 2009)。

日本交流基金の2012年と2015年の調査結果によると漫画、アニメ、J-Pop等に興味を持ち日本語を学習している学生数が増えている(Japan Foundation, 2012)。例えば、ファンサブとはファンによって作成されたアニメやドラマの非公式字幕だ。ファンサブではジョーク、歴史、食べ物、文脈等の解説ノートがでている。しかも、マンガも文

法、文法、語彙導入にもよく使われる(Lunning 2006)。このように文化を取り入れながら外国語の授業をすることが望ましい。

4. 研究

4.1　調査の対象

この研究に参加した人は日本人３０人、アメリカ人２９人、合計５９人だった。

4.2 調査方法

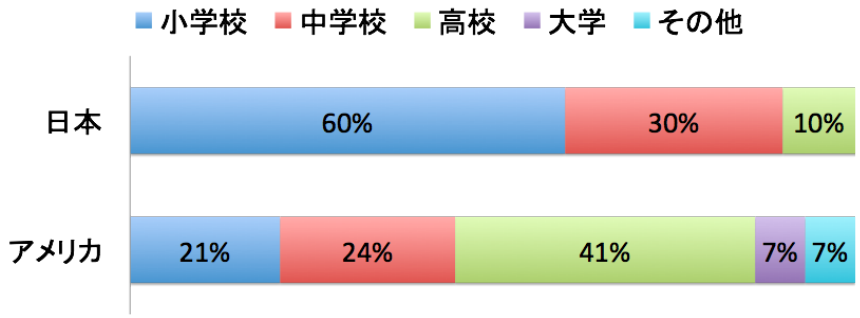
データはオンラインにより日本語のアンケート調査用紙と英語のアンケート調査用紙でデータを集めた。

5. 結果

5.1　研究質問１：日米の外国語の授業ではどのように文化を取り入れているのか。

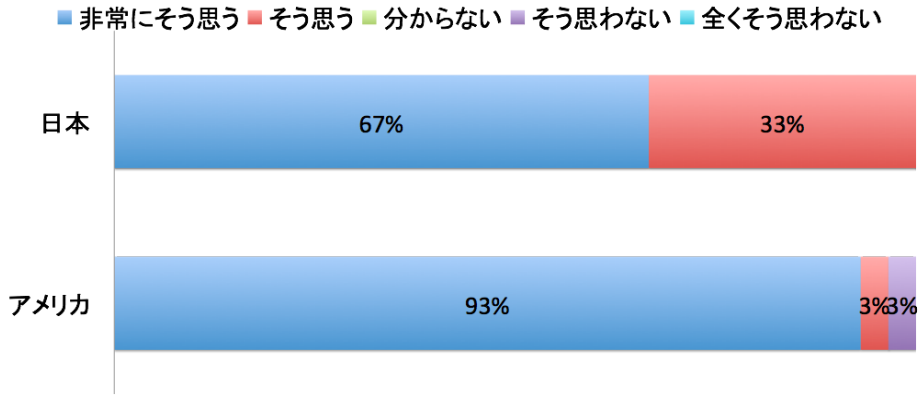
この研究質問に対し、いくつかの質問をした。いつ外国語の勉強を始めましたか、という質問に対して60%の日本人は小学校で勉強を始め、41%のアメリカ人は高校で勉強を始めたと答えた（図１参照）。

図１：教育制度



外国語を学ぶ時にその外国語の文化を学ぶことは重要だと思うか、という質問に対して日米の大学生は文化が外国語を学ぶ時に非常に重要だと思っているが、より多くのアメリカ人が強くそう思っていることが分かった（図２参照）。

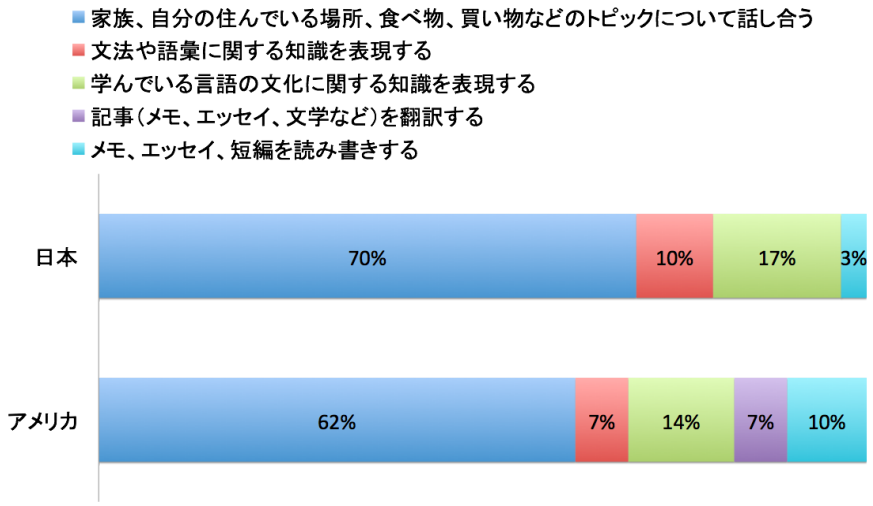
図２：外国語の文化を学ぶことは重要か



学校で外国語をどのように教えるべきだと思うかという質問に対して、アメリカの学生も日本の学生も「私の家族」や「買い物」などの日常的なトピックについて話し合

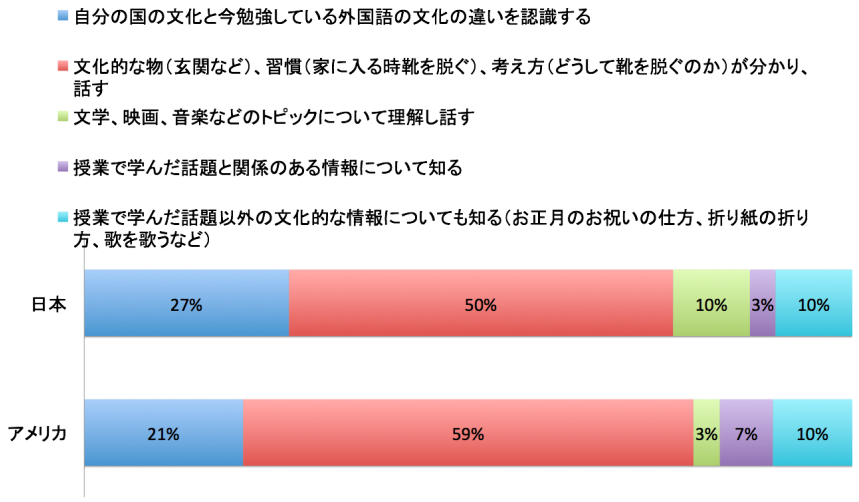
うことができるべきだと思っているようである（図３参照）。

図３：外国語をどのように教えるべきだと思うか



外国語の授業ではどのように文化を教えるべきだと思うかという質問に対して、大学生の半数以上は文化のプロダクト、プラクティスとパースペクティブについて話せることが必要だと思っている（図４参照）。

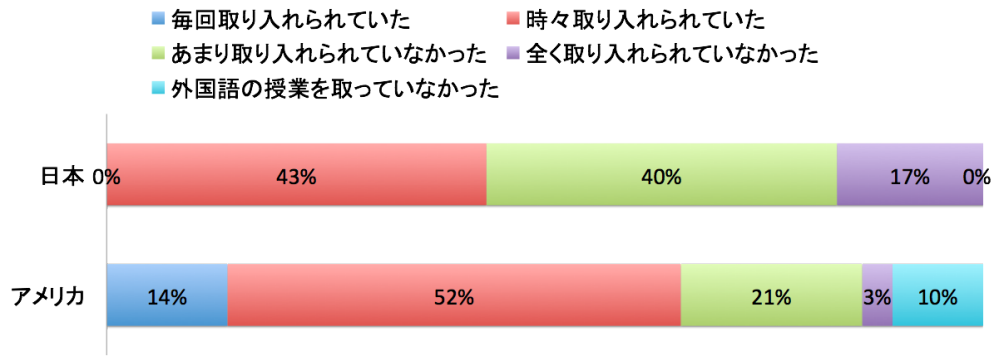
図４：外国語はどのように文化を教えるべきだと思うか



高校の外国語の授業で、文化はどれくらい取り入れられていたかという質問に対し

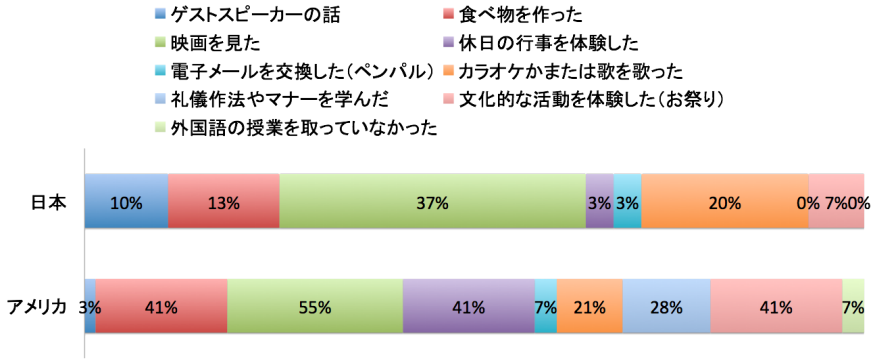
て、アメリカの学生の約６５％が高校で文化のレッスンがあったと回答したが、日本の学生の場合は約４３％にとどまっている（図５参照）。

図５：文化はどれくらい取り入れられているか



高校の外国語の授業で一番思い出に残っている文化についての授業を３つ選んでもらうと、日本では映画とカラオケが印象に残っている。アメリカでは映画、食べ物を作る、行事やお祭り等文化的体験があげられた。この結果からアメリカでの外国語の授業には様々の文化体験がくみこまれていることが分かった（図６参照）。

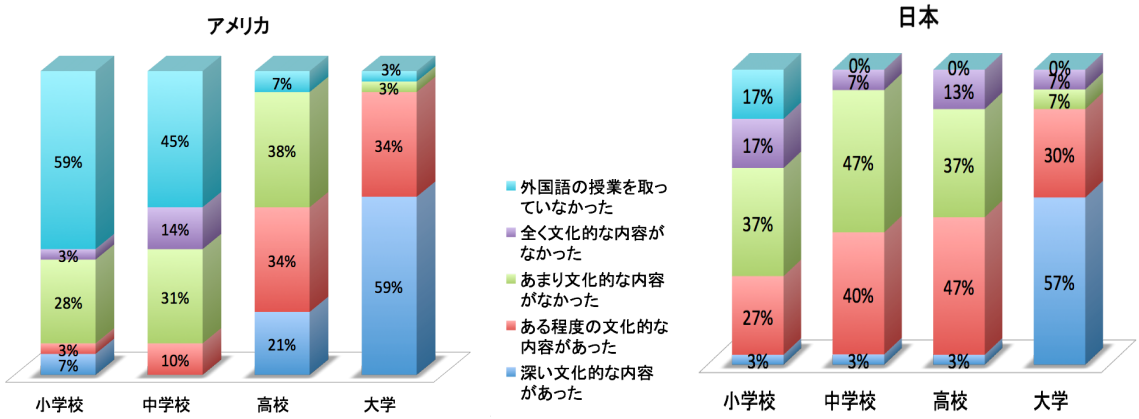
図６：高校の外国語の授業で一番思い出に残っている文化



あなたが今まで取った外国語の授業にはどれくらい文化的な内容があったか、という質問に対して、日本もアメリカも小学から大学に行くに従い文化的な内容が増えているがどちの国も大学での授業に文化が深く入っていることが分かった。また全体的に見

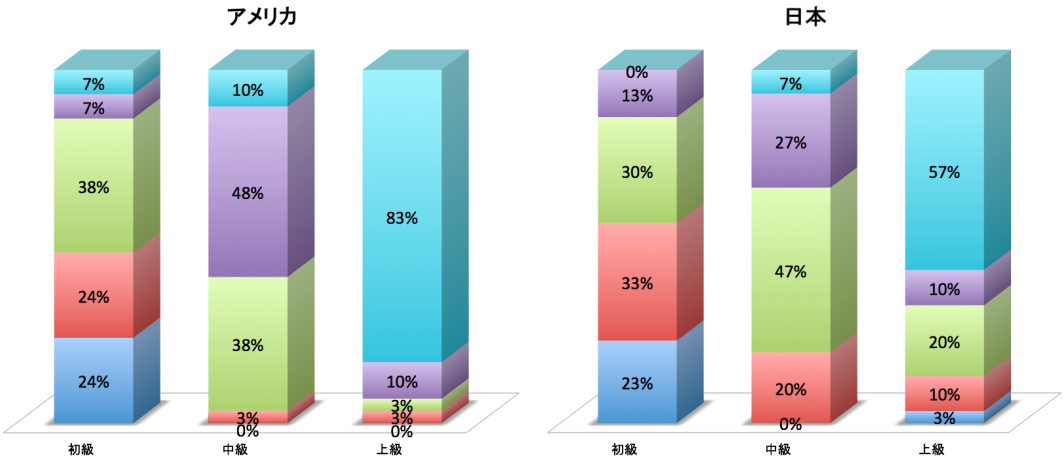
ると日本の方が小学から大学まで、文化の導入の量が多いことも分かった（図７参照）。

図7:あなたが今まで取った外国語の授業にはどれくらい文化的な内容があったか。



あなたはどのぐらいの割合で文化的な内容をそれぞれのレベルの外国語の授業で教えた方がいいと思うか、という質問に対して両国の学生は初級から上級に進むに従い言語で文化を教えるべきだという考えが強い。国別に比べるとアメリカの８割の学生のが文化をターゲットの言語で教えるべきだと思っていることが分かった（図８参照）。

図8:あなたはどのぐらいの割合で文化的な内容をそれぞれのレベルの外国語の授業で教えた方がいいと思うか。



- 80%－100%（勉強している言語で文化を教える）
- 60%－80%が文化的な内容
- 40%－60%が文化的な内容
- 10%－30%が文化的な内容
- 0%－10%（ほとんど文法と語彙のみ）

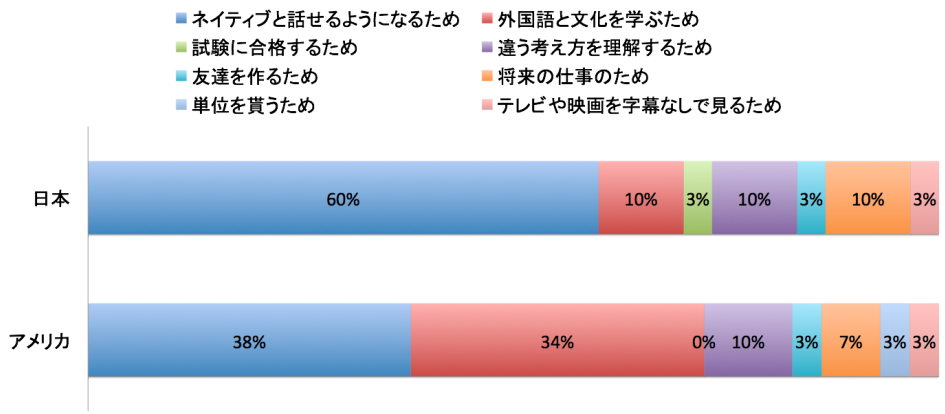
5.2 研究質問１のまとめ

過半数の日本の学生は小学校から外国語を学んでいるがその授業にはあまり文化に関しては導入されていないことが分かった。アメリカでは小学校から外国語を始めた学生は２０%と少なく、高校から学んだ学生が４０%と一番多いようだ。その高校での授業には文化がある程度導入されていることが分かった。日本では映画を使って文化を導入する傾向があるが、アメリカでは料理、行事やお祭り等の文化的な活動等を授業にとりいれるなど様々の体験を通して文化を学ぶようだ。両国の学生は初級から上級に進むに従い言語で文化を教えるべきだという考えが強い。アメリカの８割の学生が文化をターゲットの言語で教えるべきだと思っていることがわかった。

5.3 研究質問２： 文化は日米の学生が外国語を学ぶためのモチベーションにどのように影響しているのか。

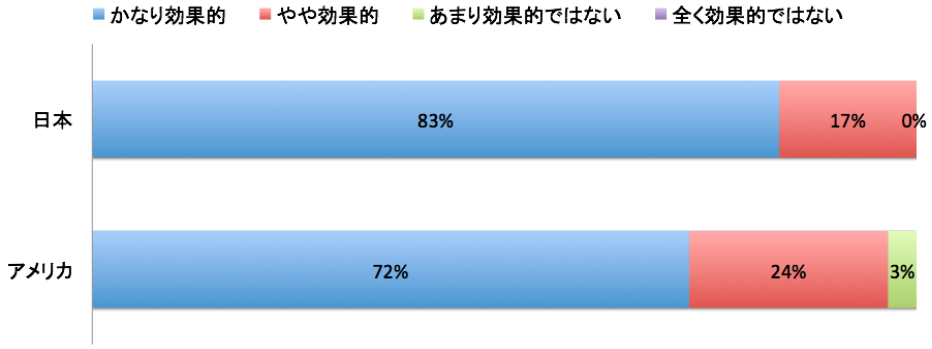
外国語を学ぶことにおいて、あなたは自分がどんなモチベーションを持っているかという質問に対し、６割の日本の大学生は「ネイティブと話せるようになるため」に外国語を学ぶと答えたがアメリカの学生の場合はそれ以外に「外国語と文化を学ぶため」に学んでいると答えた（図９参照）。

図9:外国語を学ぶことにおいて、あなたは自分がどんなモチベーションを持っていると思うか。



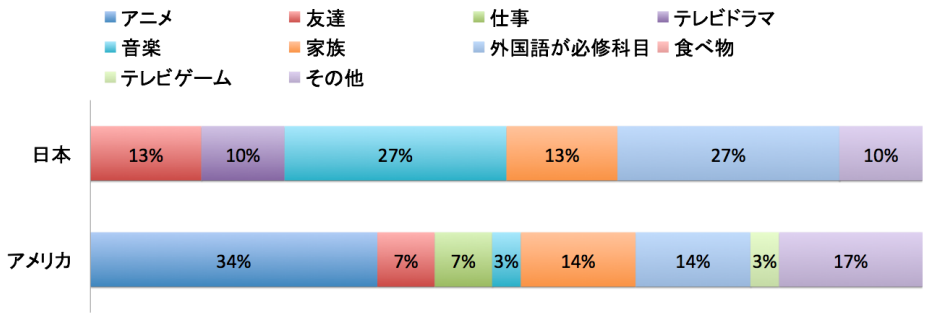
学びたい言語の文化を学ぶことは、外国語の習得において外国語を学ぶ意欲にどの程度の影響を与えるか、という質問に対して過半数の大学生は、文化を学ぶことが学習習慣にプラスの影響を与えると思っている（図１０参照）。

図10:学びたい言語の文化を学ぶことは、外国語の習得において あなたの外国語を学ぶ意欲にどの程度の影響を与えるか



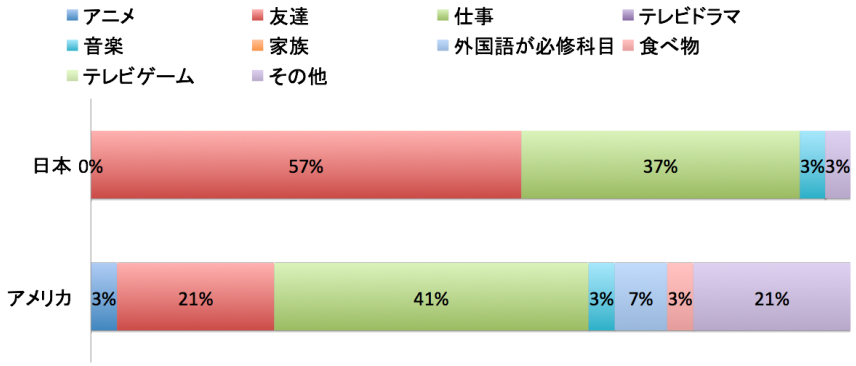
外国語を初めて勉強した時のあなたのモチベーションは何だったか、という質問に対してアメリカの学生の「アニメ」が一番あげられるが、日本の場合は必修だからの他に高かったのが音楽だが、外国語を学んだ動機にはばらつきがあることが分かった（図１１参照）。

図11:外国語を初めて勉強した時のあなたのモチベーションは何だったか。



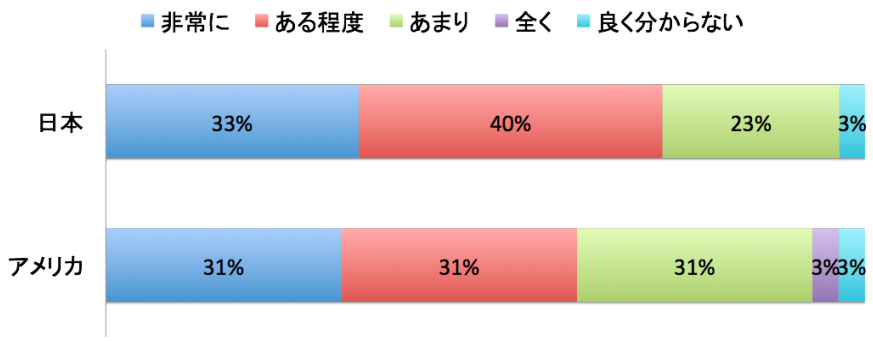
現在の外国語を学ぶモチベーションは何かに対してはアメリカの学生の場合はアニメから仕事に変わっている。日本の学生の場合はおよそ５割が友達を作りたいと将来の仕事に役立つからに変わっている（図１２参照）。

図12：現在の外国語を学ぶモチベーションは何か。



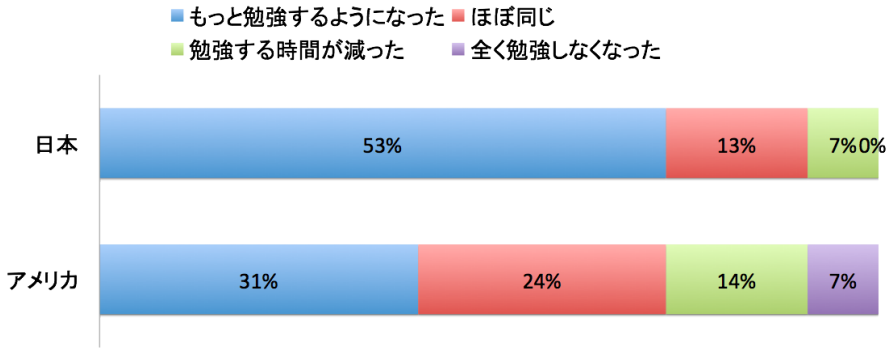
あなたが外国語を学びたいと思った最初の目的は、変わったと思うか、という質問に対して両国の学生は変わったと思っている（図１３参照）。

図13:あなたが外国語を学びたいと思った最初の目的は、変わったと思うか



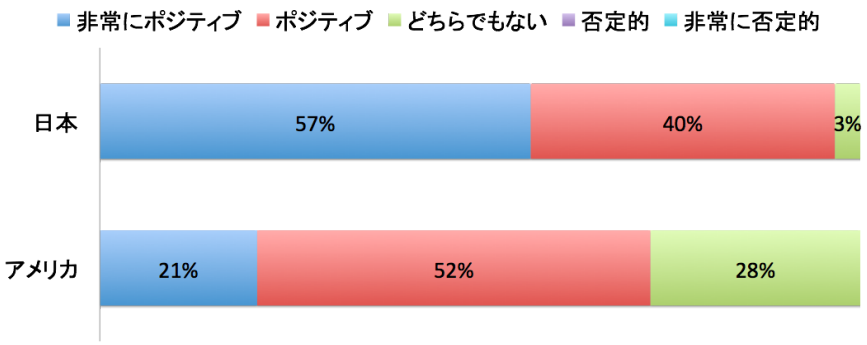
「変わった」と答えた人に、勉強の習慣がどのように変わったかと聞くと、約５割の日本の学生がもっと勉強するようになったと答えたのに対し、アメリカの学生はもっと勉強するようになったは３１%にとどまっている（図１４参照）。

図14:「非常に」あるいは「ある程度」を選んだ方は、勉強の習慣はどのように変わったか。



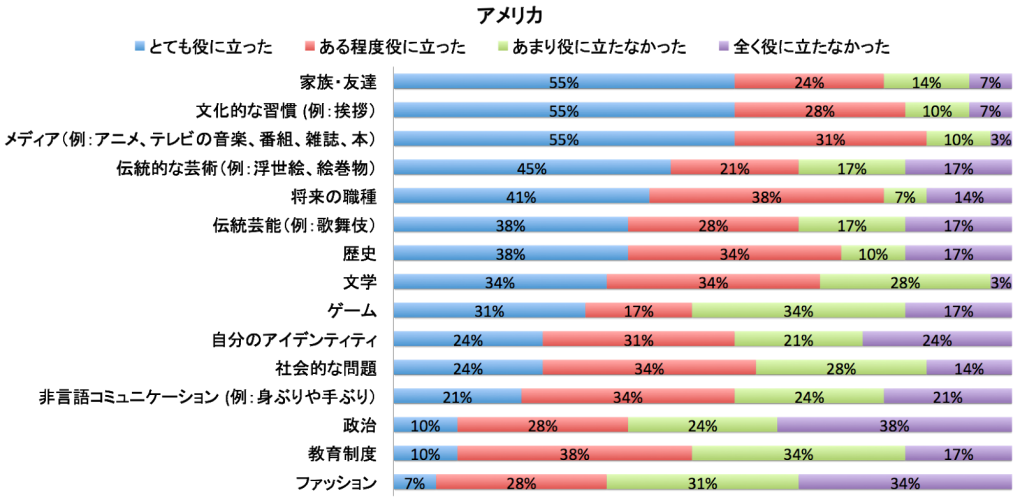
今までの外国語の勉強の経験を、どのように評価しているか、という質問に対してどちらの国の学生も肯定的な経験をしているが、日本とアメリカを比べると９７%と日本の学生の方がいい経験をしていることが分かった（図１５参照）。

図15:今までの外国語の勉強の経験を、どのように評価するか。



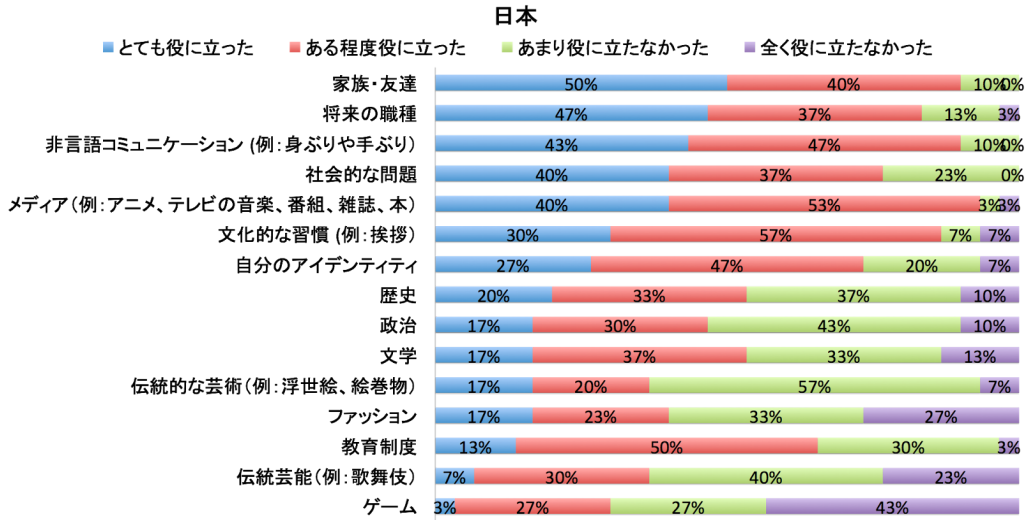
あなたが外国語のクラスで学んだトピックの中で、モチベーションを高めるために役立ったものは何ですか、という質問に対してアメリカの大学生は、メディアと文化習慣、家族友達に関するトピックがを非常に役立っていると思っている（図１６参照）。

図16:外国語のクラスで学んだトピックの中で、モチベーションを高めるために役立ったものは何か。



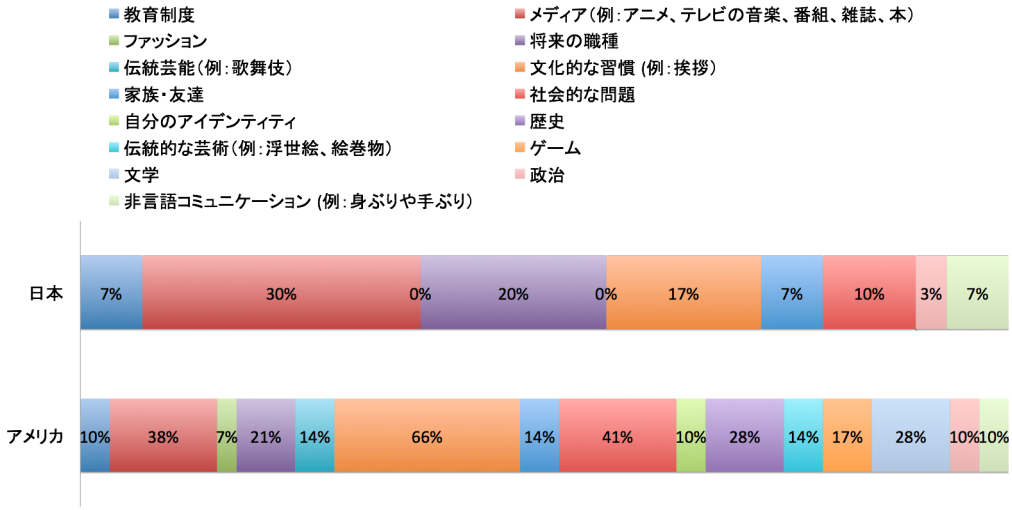
一方日本は日本の学生は、家族・友人、将来の職種、非言語コミュニケーション、メディア、文化的習慣などのトピックが役立っていることと思っているようだ（図１７参照）。

図17:あなたが外国語のクラスで学んだトピックの中で、モチベーションを高めるために役立ったものは何か。



外国語をより良く学ぶために、取り入れるべき文化としてはアメリカは文化的な習慣、日本の学生はメディアを通しての文化を学びたいとおもうかに関しては日本の場合はメディアが一番多く、次に将来の職種があげられた。アメリカの場合一番高かったのが文化的な習慣でその次に社会的な問題、メディアと続いている（図１８参照）。

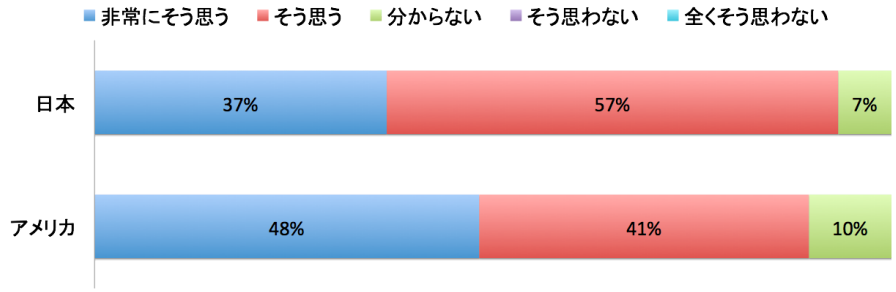
図18:外国語をより良く学ぶために、外国語の授業にどんな文化を取り入れて欲しいと思うか



外国語のクラスで多くの文化を取り入れたら、より多くの学生が外国語を勉強するようになると思うか、という質問に対して両国の学生のほとんどがそう思うと答えた

（図１９参照）。

図19:外国語のクラスで多くの文化を取り入れたら、より多くの学生が外国語を勉強するようになると思うか



5.4 研究質問２のまとめ

日本の学生もアメリカの学生も外国語の授業では文化を学ぶことでより学ぶ効果が上がり、学習者そうも増加するという考えを持っていることが分かった。学習も動機もアメリカの学生は始めはアニメでしたがキャリアに繋がるものに変わり、日本人は必修科目から友達や音楽などの「楽しみ」に変わって来た。日米の学生共にメディアを通して文化の習慣を学ぶ事、実社会で使える知識が大事だと思っているようだ。

６．　結論

結論は、両国の大学生は外国語を学ぶ上で、文化がとても大切だとしている。日米の学生は学習が進むにつれ学習目的が変わってきる。日本の学生は、必須科目だから勉強したいたが、次第に友達を作りたい、アメリカの学生はキャリアに繋げたい等と学習の目的が具体的になる。つまり両国の学生は言語的な知識よりメディア等を通して友達との会話や仕事で使える言語能力がつくことをのぞんでいる。そのためには文化はとても重要だ。ですから生教材を通して体験型文化の学習が外国語教育には望まれる。

７．　研究における限界点と将来の研究課題

研究における限界点は参加者の人数が少なく、過半数の回答者が外国語専攻の学生や留学生だったので結果を一般化することは難しい。

将来の研究課題としては外国語を専攻しておらず、留学をしたことのない学生を調査したい。また日本の2020年の英語教育リフォームの後に、人々の意見がどのように変わったかも調査したい。

参考文献

ACTFL. (2012). ACTFL Proficiency Guidelines 2012. Retrieved from https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-202

Awad, G. (2014). Motivation, persistence, and crosscultural awareness: A study of college students Learning foreign languages. *Academy of Educational Leadership Journal*, *18*(4),97-116.

Clark, G. (2009). 日本の英語教育は何がまちがっているのか. Retrieved from http://www.gregoryclark.net/jt/page55/page55.html

Cutshall, S. (2012). More than a decade of standards: integrating “culture” in your language instruction. *The Language Educator*. 32-37

ICEF Monitor. (2015). Japanese education reforms to further prepare students for globalised world. From http://monitor.icef.com/2014/02/japanese-education-reforms-to-further-prepare-students-for-globalised-world/

Japan Foundation. (2012). Survey on Japanese-Language Education Abroad 2012. Retrieved from https://www.jpf.go.jp/e/project/japanese/survey/result/

Japan Foundation. (2015). *The Japan Foundation survey on Japanese language education institutions 2015: U.S. data*. Los Angeles: Japan Foundation.

Larsen-Freeman, D., & Anderson, M. (2016). *Techniques and principles in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Liu, Y. (2013). Applying comprehensible input and culture input methodology to inspire college students' learning motivation. *Theory and Practice in Language Studies*, *3*(11), 2072-2077.

Løfsgaard, K. A. (2015). The history of english education in japan - motivations, attitudes and methods. Retrieved from https://www.duo.uio.no/handle/10852/45769

Lunning, F. (2006). *Mechademia 1: Emerging worlds of anime and manga*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.

Mahadi T. S., & Jafari S. M. (2012). Motivation, its types, and its impacts in language learning: International. J*ournal of Business and Social Science. 3*(24), 232.

Masaaki, K. (2013). English to get 2020 push but teachers not on same page. Retrieved

from http://www.japantimes.co.jp/news/2013/12/31/national/english-to-get-2020-push-but-teachers-not-on-same-page/#.WNLg3KLjLIX

National Standards in Foreign Language Education Project. (2012). *Standards for foreign language learning in the 21st century: including Arabic, Chinese, Classical Languages, French, German, Italian, Japanese, Korean, Portuguese, Korean, Portuguese, Russian, Scandinavian languages, and Spanish*. Yonkers, NY: National Standards in Foreign Language Education Project.

Ogura, M. (2014). 高等学校における新学習指導要領に対応した英語指導法. *日本福祉大学全学教育センター紀要, 2*.

Perugini, D. (2015). Integrated Performance Assessment for Elementary Learners. Retrieved from https://www.slideshare.net/peruginid/westport-pd-ipas-in-the-fles-classroom

Swanson, P. (2015). Building Your Core: Effective Practices for Language Learners and Educators. *The American Council on the Teaching of Foreign Language,* 19.

Tanaka, H. (2009). 3つのレベルの内発的動機づけを高める: 動機 づけを高める方略の効果検証. *JALT Journal, 31*(2), 227-250.